「山さけて 成しける池や 水すまし」

神奈川県秦野市の「震生湖」湖畔に立つ物理学者寺田寅彦の句碑である。他にも「聴すすきや　地震（ない）に裂けたる山の腹」と昭和 5年、調査のため訪れた際詠んでいる。

11月上旬、快晴無風の日、友人と小田急線秦野駅から歩きだし、白笹稲荷神社を経て「震生湖」を訪れた。駅から2.6 キロと近いのだが、ずっと登りである。紅葉にはまだ早かった。湖畔の遊歩道を歩き、急な階段を登り、道路に出た。ここからほぼ平地の渋沢丘陵を歩くこと3.7 キロ、渋沢駅に着いた。バスは1 日1 本なので歩くしかない。

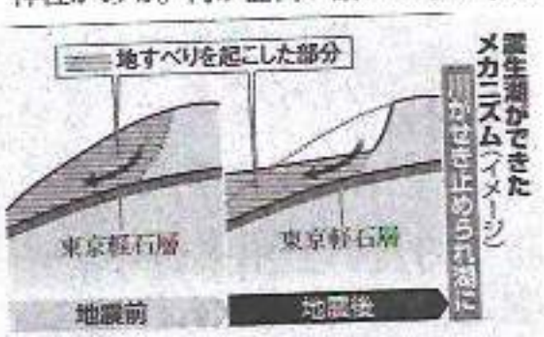
「震生湖」は文字通り、大正12年9 月1 日、相模湾を震源とする関東大震災で、約200 ㍍にわたり渋沢丘陵が崩れ、市木沢をせき止めて出来た。面積1300平方㍍、周囲1 キロ、水深4-10㍍。淡水。流出、流入河川なし、地下水脈とつながっている。地震の際、近くの小学生2 人が付近で行方不明になったとか。その後、見つかったのかどうかわかっていない。

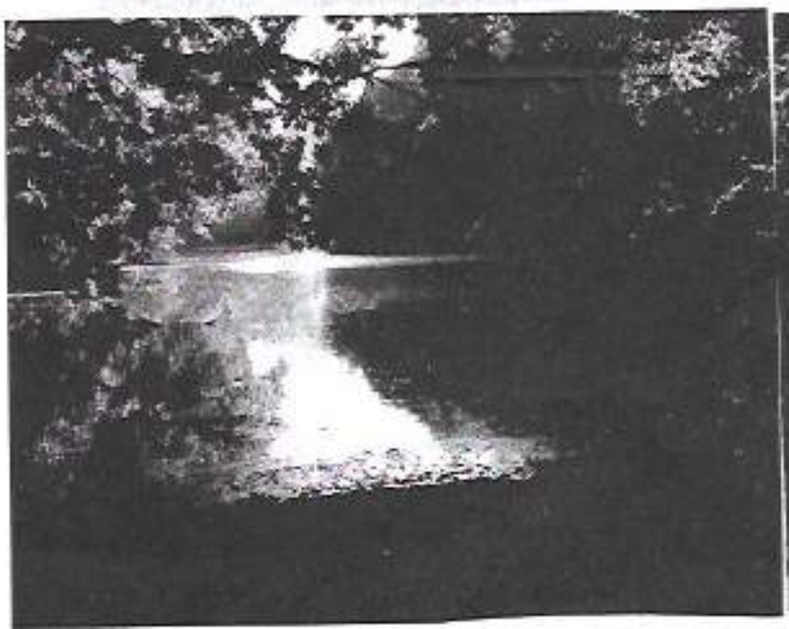
鯉、ヘラブナ、オイカワなど魚類も豊富。かわせみなど四季おりおりの野鳥も観察できる。私たちは湖畔のベンチで休んだ。木漏れ日の中、周囲はあくまで静かであった。

朝日新聞の報道によると、昨年京都大学防災研究所の千木良雅弘教授らが、震生湖のボーリング調査、地層の観察を行った。この結果、山崩れ、すなわち地滑りを起こした部分の17㍍下には「東京軽石層」があることが分かった。6 万年程前の箱根山の大噴火で噴き出した軽石が積もった地層で、風化して柔らかくなり、滑り台のようになっている。地震でこの滑り台の上を土が滑るように崩れていったのではないか、という。

「東京軽石層」は箱根山の東側に分布し、秦野市付近で1 ㍍、横浜市付近でも30㌢の厚さがある。軽石層より上の斜面が不安定になるように造成した場合は、軽石層の上の部分が滑りやすくなる危険がある、という。風化して柔らかくなった軽石層に雨が浸透すると滑りやすくなる、点検が必要だ、としている。

今年10月、河口湖近くの山梨県立富士山自然遺産センターを訪れた。その時の話で、本土に住んでいたアイヌが、富士山を「フチさん」「フジさん」と呼んでいたという。フチもフジもアイヌ語で「火」を意味し、富士山がかつて活火山であったことがわかる。箱根山といい、昔、日本各地で山の煙があちこちで上がっていた。ちなみに、浅間、阿蘇などAsプラス母音の言葉は火山に関係ある、と寺田寅彦が随筆で書いていた。富士山にも浅間神社がある。何か面白い話になるかもしれない。（写真窪川さん、小林）



震生湖ができたメカニズム（イメージ）
崩れてせき止められた

東京軽石層の厚さ（―）と震生湖の位置　数字はキロメートル。新編 火山図アトラス（東京大学出版会）の図などを元に作製